

科学と社会委員会
科学と社会企画分科会
(第24期・第3回)
議事次第

1. 日 時 令和元年7月3日(水) 10:00～12:00

2. 会 場 日本学術会議5階 5-C(1)会議室

3. 議 題

- 1) 学術会議提言やシンポジウム等の社会への発信について
- 2) SDGs の取り組みの展開
- 3) 政府との関係のまとめ
- 4) 外国人アドバイザー
- 5) その他

(添付資料)

資料1-1	科学と社会委員会科学と社会企画分科会 議事要旨	1
1-2	科学と社会委員会 議事要旨	6
資料2	日本学術会議のSDGs への取り組み	20
資料3-1	日本学術会議の今後の展望について	26
3-2	各国アカデミーの比較	27
資料4	日本学術会議アドバイザー等について	28

科学と社会委員会 科学と社会企画分科会
議事要旨

第 1 回	・ ・ ・ ・ ・	1
第 2 回	・ ・ ・ ・ ・	3

1 日 時 平成30年9月14日（金） 13:00～15:00

2 議事要旨

（1）役員の選出について

- 委員長に渡辺委員、副委員長に高山委員、幹事に藤原委員及び川口委員がそれぞれ選出された。

（2）日本の展望に続く提言について

- 渡辺委員長より、資料2-1「日本の展望に続く日本学術会議の提言に関する全体の進め方」の説明があり、引き続き若手アカデミーの会員でもある川口委員より、若手アカデミーからの提案として、資料2-2「日本の宿題—学術からの提案2020—」について」の説明があった。これらに基づき意見交換があり、要旨は以下のとおり。
 - ・若手アカデミーからの提案は、学術のための学術ではなく、**将来のための提言**というものが、**社会がちゃんと動くように提言**しようということだと思う。
 - ・若手アカデミーでも、高校生とか中学生にも分かりやすいメッセージを出せるようなシンポジウム等をという話がよく出ている。**学術の次の担い手を考えていく**時にとっても重要なので、今回のものとかも彼らを含めて何か言えるものがあるといいなと考えている。
 - ・提言を学術会議が出すということ自体で、出し手が高いところから社会に向かって言っているという背景が出来てしまっている。この文脈が社会にとって圧迫感があるとか、耳を塞ぐという要因になっているという話もある。
 - ・圧迫とか認知というよりも、どちらかというと、認知されていない、誰も来てくれない。23期は、提言を動画にしてユーチューブか何かで出したらどうかという案があった。こちらから出ていかないといけない。
 - ・動画はポイントが高い。認知されていない、あるいは認知している人でも自分とは関係ない、偉い人たちの集団で関わりたくない、というイメージがある。その辺をそのままにしておくとか何を言っても誰も見向きもしない。
 - ・**社会にとって学術**がどう貢献するかということが一つあり、もう一つは、**学術そのものについての問題点**を提示するという2本柱を提言としてまとめるのは意味があると思う。やるとしたらその二つ、その上に総論的なものをまとめて2+1ならば2本立てというのがいいのかなと。特に社会への貢献については、簡略化した中高校生向けの分かりやすいバージョンをアニメ・漫画で見せるというのも有りかと思う。一方、学術への提言については、対象が違うのでアニメ・漫画などは必要ない。こういう構成でいいかなと思う。
 - ・学術のための学術ではなく、学術会議というのは、そのことが社会全体にとって意味があるということを説明する必要がある。
 - ・山極会長もいつも言っているが、一方的に学者がこうあるべきだということを社会に言っても社会が受け付けない、だから対話をしながら、学者でない人が何を望んでいるか、政府とも対話をしながら、こちら主張することは主張するというをやっているといけなない。一方的なのはもう無理、というのが今期の違うところ。
 - ・世代別もしくは暮らし方別に、学術はこう貢献していますというのもある。10年後には、今書いたことはこういうふうに関与すると思います、ということをメモしながら書いていくと、自然と受け入れられやすい話にはなるのかなと思う。
 - ・基本方針としては、資料2-1の2①の記載のとおり、「学術のための学術」と「社会のための学術」の両方の観点から審議し、内容について幹事会で審議してもらう。

- ・体制については、「学術のための学術」は科学者委員会で、「社会のための学術」は科学と社会委員会で審議する。
- ・上記の審議のため、科学者委員会に新たに分科会を作り、科学と社会委員会は、当面この科学と社会企画分科会で審議する。
- ・部・分野別委員会に対しては、上記の委員会での審議内容について意見照会するような形にする（前回のように分野ごとの提言は出さない）。

- 今回議論した基本的体制等について、渡辺委員長から10月3日（水）の幹事会に提案することが了承された。

（3）アジア学術会議について

- 渡辺委員長より、12月5日（水）～7日（金）の3日間開催について報告がされた。

（4）その他

- 次回開催については、日程調整をした後、連絡することとされた。

以 上

1 日 時 平成31年12月28日（金） 15:00～17:00

2 議事要旨

（1）日本の展望2020案の内容について

●渡辺委員長より説明があり、意見交換が行われた。主な内容は以下のとおり。

- ・10数項目の日本が抱える重要課題が挙げられているが、社会の実際の問題である人口縮小など具体的な問題と、学術に関連して起きている、例えば、研究力の低下、大学の改革等は、性質が異なる。こういったタイプの課題にフォーカスするかということ、最初に明確に検討して、その中からどれを取り出すかという話をすべきかと思う。
- ・問題を問題として認識している時点としては、専門家には解決策は見えているわけで、そこで学術の知見で問題を問題として適切に捉えるというものを出す。つまり学術が何をしますかではなく、ここまでの**学術のプロダクトとして、日本の問題をちゃんと捉えています**、というものを出すのが大事ではないか。
- ・2030年、2050年に向けてシナリオも書きましようということになっているので、今抱えている問題が、どこ時点での課題なのかということが重要。2030年、2050年も課題のままあり続けるのかというのを、もう少し丁寧に整理する必要があるのではないか。そういう意味で、山極会長の2030年、2050年に向けた方向性で学術がどう考えて、社会に対してどういう発信をすべきなのか、という書き方は、危機感を煽るのではなくて、こういう日本になって行きましょう、という形の結論の付け方で整理できればよいと思う。
- ・企画分科会から具体的な案を、「こういうのもあります」というような形で会長に提案し、そこから修正していった方がいいのではないか。

*現在は幹事会附置委員会の22人ぐらいで議論しているところなので、企画分科会から提案を含めるなり、体制をどうやっていくか、次回の展望委員会に議論する予定。これを議論するのに当たり、若手アカデミーでの議論をどう扱うか考えているが、他の委員の意見を聞きたい。

・現在の状況を見ると、別々で書いて作った方がよいのではないか。高校生以下の人たちが理解できるようなものであることが望ましい。

・若手アカデミーとしての視点で検討・作成することはできると思う。

・**学術というのに何を期待しているのか、忌憚のない意見を貰った方がいいのではないか。**ここに外部との議論を通じてと書いてあるが、本当にやるのであれば、内部の委員会というよりは、外部の人に日本学術会議はこういうところがおかしいのではないかとか、あるいは30年前、50年前の大学のイメージで語られては困るとか、そういう対話が必要ではないか。

（2）SDGsの取り組みについて

●渡辺委員長より、資料2-1及び資料2-2により説明があり、意見交換が行われた。主な内容は以下のとおり。

*ここで聞きたいのは、どういうプロセスでやっていけばいいのか、運営的なことである。

・機械的に、提言を出した委員会や分科会が、関連しているSDGsを申し出るのでもいいのではないか。

・既に今期公表された提言については、責任者にチェックリストの追加部分を提出いただくよう進めるのがよい。

(3) 第18回アジア学術会議科学と社会委員会と若手アカデミー合同会議報告について

- 西嶋委員より、資料2-3のとおり報告があった。主な内容は以下のとおり。
 - ・難しかったと思うのは、議論に加わって欲しい人をこの会議に呼ばなかった。そういう人を呼べると話題提供をもとに、もっと活発な議論ができたと思う。
 - ・あの場でこのようなテーマの会を設けること自体に意味があったと納得している。
 - ・まず一歩ということで、あの形式に縛られない形で、もう少し展開していくのがよい。

(4) 異なる意見の公表について

- 渡辺委員長より、資料3により説明があり、意見交換が行われた。主な内容は以下のとおり。
 - ・資料38ページの最近改定したチェックシートの「9. 既出の提言等との関係、日本学術会議の既出の関連提言等を踏まえ、議論を展開している。はい or いいえ」が従来からあるが、さらに追加された「※9で「はい」を記入した場合、その提言等のタイトルと発出委員会・年月日をお書きください」があるので、これを参考に提言者と幹事会で検討すればよい。
 - ・提言の最初には、「この提言は、〇〇委員会（分科会）の審議結果を取りまとめ公表するものである。」と記述があるので、基本的には立場や分野によって異なる意見が出ることも当然あると認識すべきである。
 - ・外部からの問い合わせや反論がある場合は、それなりの検討と対応が必要であるが、基本的には異なる意見があることを示すのは問題ない。
 - ・特に反論等のない場合でも、対立する意見をもとに対話をするシンポジウムなどの企画をするのも一案である。

(5) 今後の活動について

- 今日の議論を取りまとめて、必要に応じて幹事会に提案すること、また、予算の関係から委員会自体が3月までは開催できないため、必要があればメール審議を行うことが了承された。さらに対面会議は4月目途で開催することが了承された。

(6) その他

- 渡辺委員長より、三成委員の辞任について説明があり、辞任及び次回の幹事会に報告することが了承された。

以 上

科学と社会委員会
議事要旨

第 1 回	・ ・ ・ ・ ・	1
第 2 回	・ ・ ・ ・ ・	2
第 3 回	・ ・ ・ ・ ・	4
第 4 回	・ ・ ・ ・ ・	7
第 7 回	・ ・ ・ ・ ・	11
第 9 回	・ ・ ・ ・ ・	13

※第 5、6、8 回はメール審議

科学と社会委員会（第24期・第1回）議事要旨

1 日 時 平成29年12月1日（金） 10:00～11:48

2 議事要旨

【科学と社会委員会役員の選出について】

- 委員長により、副委員長には小林委員が、幹事には小安委員と高橋委員が指名され、委員会の同意を得て了承された。

【科学と社会委員会の運営について】

- 第24期に向けた本委員会の運営について、渡辺委員長より科学と社会委員会構成案（資料3）に基づき説明し、審議したところ、分科会の設置については原案通り決定することが了承された。

- 持続可能な開発目標（SDGs）への対応については、本委員会で扱うことで大筋は合意したが、多岐にわたる内容からして、本委員会でどう取り組むべきものか、日本学術会議全体として考える必要があるのではないか等について議論があり、引き続き検討することとなった。

今回の主な意見は以下の通り。

- ・SDGsとフューチャー・アースは範囲が被るので、本委員会とフューチャー・アースの推進と連携に関する委員会との住み分けが必要ではないか。
→渡辺委員長が、会長及び武内副会長と相談することとなった。
 - ・国際科学会議（ICSU）のSDGsに関するレポートについて勉強する必要がある。
 - ・次回委員会で、前期SDGs分科会の委員からのヒアリングを行いたい。
- 分科会の設置及びサイエンスカフェへの対応から委員決定を急ぐ必要がある科学力分科会（後に「市民と科学の対話分科会」に名称変更）の委員の決定について、12月22日の幹事会に提案することが了承された。
- 12月22日の幹事会に提出する分科会の内容については、委員長と事務局に一任することとなった。
- 次回委員会は1月～3月に開催することとし、事務局で日程調整を行うこととなった。

以 上

科学と社会委員会（第24期・第2回）議事要旨

1 日 時 平成30年1月30日（火） 10:00～12:10

2 議事要旨

（1）第1回議事要旨（案）確認

- ・出欠者に誤りがあり、松浦委員を欠席者に追加、欠席者とした藤原委員は出席していたので、これを訂正すること。

（2）SDGsへの取組について

- 沖先生より説明が行われ、主な内容は以下のとおり。
 - ・「誰一人取り残さない」が発展途上国支援限定ではないことを示しているが、法的拘束力はなく大義名分（理想主義）が中心
 - ・途上国からSDGsへの期待は先進国からの投資、一方、先進国は期待に応えるためにもイノベーションが必要だと考えている。
 - ・**経済、社会、環境という3つのバランス**をとることが大事。
 - ・パリ協定、仙台防災枠組みとリンク
 - ・**芸術の振興や知的好奇心の満足など精神面や文化的な目標**は入っていない。
 - ・ICSUのSDGsへの論評は主に、①目標間のトレードオフ、②他の国際合意との整合性が必要、③目標17が多すぎるため目標の集約が必要、④Sustainable water managementはmanagementをuseにすべき、⑤地域間で喫緊の課題が異なることを反映させるべき、だが、これまでのところ特段考慮されたり、反映されたりはしていない。
 - ・政府や国際機関だけではなく、企業の本業としての参画が必要。
 - ・日本学術会議への期待は、**Well-being 増大**に貢献する学問の追及、SDGsへの学術としての主体的貢献、**自分たちが得たい未来を実現するための学術**を進めることである。

（3）本委員会の取組みとフューチャー・アースの関係について

- 日本学術会議としてのSDGs取り組みについて、主に以下のような意見が出された。
 - ・全ての部、委員会などがSDGsとの関わりを考え、認識することが必要
 - ・3つの部と若手アカデミーなど、組織を超えて議論し、取り組むことが必要、各組織に閉じないことこそ大事
 - ・第23期からの申し送り事項と沖先生スライドにある「SDGsと学術、科学技術」を問題提起として各部などで議論してもらうのがよい。
 - ・エビデンスベースで議論を進めることが必要
 - ・政策決定に資する学術的なエビデンスを示すことが学術の貢献となる
- 3月30日（金）の幹事会に日本学術会議としてのSDGs取り組み案を提案し、4月の総会及び総会時の部会で議論してもらう。内容については、渡辺委員長が素案を作成し、メールでの意見交換により作成することとなった。

（4）地方学術会議について

- 渡辺委員長が各委員の意見を聞きたいとのことで、主に以下のような意見が出された。
 - ・幹事会決定中「共同主催国際会議の地方開催等の機を活用するなど」は、どのくらい拘束力を持つか。
 - この部分は強い拘束力を持たない。
 - ・予算はどのくらいか。実質的に地区会議を強化するのか。分野別委員会でもいいのか。
 - 予算は約500万円、事業に使えるのは約200万円程度と見積もっている。

- ・地区会議の活動では、結構一般の人が来ている。もう少し実質的に地域に役立つ活動ができればいいのではないか。
- ・夏季部会と抱き合わせるという考え方がある。
- ・地方開催だと、そんなに人数も多くなく、フランクに色々な意見が出る。そういうことが地方開催のいいところではないか。
→地区会議から何か案を出していただく、という考え方もある。
- ・決定文を見るとかなりはっきりとしたイメージがあると見受けられるが、どれだけ議論の余地、自由があるのか。
→移転の話が、議論を重ねる中で地方学術会議で対応する整理となった。予算上は今まで地区会議等の活動があった上で、それとは別に新たに地方学術会議を行うという位置づけであり、文脈として、地方創生に資するべきということもある。
このような背景を踏まえ、地方学術界のみならず、マスコミや産業界とも連携を企画していただくのが一つの対応だとして、このような記載となっている。
- ・組織の規定はどうなるのか。地区会議は規定されていたと思うが、どのようになるのか。
→今後の検討による。地方学術会議はいわば政策パッケージと考えているが、地方学術会議の性格が今後規定される中で、必要があれば規定されることもあると思う。

(5) 提言等の関係機関への展開について

- ・時間の関係から審議出来ず。

(6) その他

- ・前期SDGsの提言に携わった沖大幹連携会員と蟹江憲史連携会員を本委員会委員に追加することとなった。
- ・次回あるいは次々回委員会で、蟹江先生からSDGsとFEの関係についてヒアリングを行うこととする。

以 上

科学と社会委員会（第24期・第3回）議事要旨

1 日 時 平成30年4月4日（水） 12:00～13:30

2 議事要旨

（1）各部でのSDGsについての議論の報告

●上記について各部より報告があった。主な内容は以下のとおり。

【第一部】

- ・ICSUのレポートを日本に当てはめた場合のレポートを出してはどうか、あるいは人文・社会系版の目標やシナジーをデータに基づき分析した文書を出してはどうか、学術会議でそれを行うのが難しければ、国際社会科学評議会にテーマとして投げかけてはどうか、との提案があった。
- ・産業界がSDGsに積極的なのは、この先50年くらいのビジネスのルールを作っていると見なしているからである。SDGsであれば誰も文句を言えなくなるようなことも考えられるので、そのような状況も見つつ、単に取り込まれないよう、しかし、同時にこちらの考え方で活用するようにする必要がある。
- ・一方、理工系においては、特定の開発目標掲げる研究は限界で、「何をすべきか」から議論をスタートしなければならなくなっている。その観点から人文・社会系に参加してもらいたいという要望は高まっているが、日本の人文・社会系はそのようなニーズに応える人材育成が弱い側面がある。

【第二部】

- ・SDGsに直ちに当てはまらない基礎研究もあり、評価に使うべきではないのではないか。
- ・一方、社会実装を目指す研究の場合は、SDGsに縛られるつもりはないが、物差しとして使えば良いのではないか。

【第三部】

- ・SDGsは必ずしも日本にぴたりと当てはまるものではないので、日本らしいもの、日本らしいやり方を提言出来れば良いのではないか。敢えて境界を曖昧にすることが日本の感覚としてあり、SDGsには無いところなので、そのような点を強調するのも一案である。
- ・これからの提言だけでなく、学術会議の過去の活動の振り返りを行う必要があるのではないか。
- ・SDGsのブリッジをどうするか。17目標の間に落ちたものを拾うべきではないか。
- ・学術会議の過去の提言をマトリックスにして、欠けているところをフォローすべきではないか。
- ・提言を作るとき、これはSDGsのこの目標に適っているというラベルを張るようなことをしてはどうか、という提案があった。

（2）科学と社会委員会で取り組む課題の進め方について

●（1）の報告を受け、科学と社会委員会としてSDGsへの取組をどう進めるかについて議論があった。主な内容は以下のとおり。

（A）SDGsに支配されない学術

- ・SDGsのステータスがわからない。これを目的に学術をやっているわけではない。結果としてSDGsに適うというのか、それとも、トップダウン的に見て足りないところに学術を誘導しようとするのか。
- ・学術がSDGsに縛られるのは問題。他方、地球規模の課題に取り組む際、社会実装に向

けて何らかの物差し、共通言語があった方が良いという点はある。

- ・理学はバウンダリがなく、それを突破するもの。工学はバウンダリがある。この区別がつかないまま、評価に使われるのは問題。

(B) 社会に対する責任としての学術から SDGs への貢献

- ・学術は伝統的にはボトムアップだが、研究費は税金であり、研究者のボトムアップだけという説明では厳しい。JST のテーマ設定でも誰のため、何のために研究しているのかによりファンディングの方向付けがされている。歴史的に見ても、アポロ計画について数人を月に送ることに何の意味があるのか問われた。Social relevance、社会にとってどういう意味があるかが問われる。SDGs はその正当化につかえるのではない。
- ・昨今の研究政策は出口指向だが、これをけしからんといっても止めようがない。そこで **SDGs を出口として利用できるのなら良いのではないか。**
- ・米国の研究者は自分の研究が何故必要か、滔々と述べるができる。
- ・自分の研究の意義を語れず、理学部や文学部がボロボロになっている。21 世紀になって PhD が減っているのは日本だけ。今のやり方は根本的に間違っている。
- ・科学者が自分の研究を戦略的に語れないのは、自分自身が分かっていないということ。SDGs という外圧がかかったことで、自分の研究の意義を反省し、考え直すチャンスになるのではないか。一方で外からやってきた評価軸により評価疲れしてはいけなので、学術側でイニシアチブを取り、理想の評価を開発する必要がある。そのためにも自らを相対化する能力、言語能力・説明能力を鍛えていくべきではないか。
- ・工学分野からみると社会に役に立たないのはナンセンス。SDGs は当たり前話であり、気にする必要もない。SDGs は手段として使いたいように使うだけの話。科学と社会の関わり合いをきちんと確立していることが重要。産業界は SDGs を徹底的に使おうとしているが、振り回されないようにすべき。
- ・SDGs は目標だが、政府などは明らかに手段として使っている。そういう意味で、提言などの前書きで使うのは真っ当な使い方と考える。

(C) 提言の構造化

- ・過去の提言・報告のストラクチャーの調査・構築を学術調査員に頼めないか。

(D) 若手の参画

- ・若手の意見も聞きたい。
- ・SDGs の良さは分かるが、若手研究者の応用志向が強くなりすぎて、「やってみたい」という若い芽を摘むようなことはしたくない。
- ・若手には、研究そのものの以外の余計なことをするんじゃないというプレッシャーがかかっている。しかし、是非やるべき。また、すぐに「あれか、これか」のような極端な議論になりがちだが、それではいけない。ボリューム感が必要。研究者全員が SDGs をやる必要はないが、そのような観点も必要である。一方、SDGs に直接関係のない深い基礎研究は全く必要ないということでもない。

(E) 学術会議からの提言

- ・芸術分野が欠けているように、今の SDGs では人類の Well-being を達成出来ないという **提言をする**方が、学術会議としては意義があるのではないか。

- 学術会議の SDGs への取組を紹介するストーリー作りについて議論があった。主な内容は以下のとおり。
 - ・ **SDGs に関連する学術会議の提言・報告をストーリーに基づいて紹介し、HP で公開**してはどうか、との提案があった。
 - ・ 提言は元々、社会的意義を考えて作っているのだから、そこに更に SDGs のストーリーは本当に必要だろうか。
 - ・ 提言等の作成の趣旨の解説のツールとして SDGs を絡めたストーリーを使うというのが良いではないか。
 - ・ 先ずは、提言を出した部がストーリーを作るのが良いのではないか。
 - ・ 既存の提言・報告を使ってストーリーの試作版を作ってみてはどうか。
 - 第一部（藤原委員）、第二部（第二部委員で相談）、第三部（中村委員）において、それぞれストーリーの試作版を作成し、次回委員会で議論することとなった。
- 今後は、①上記のストーリー作り、②日本の学術からの SDGs への提言、の 2 つについて進めることとなった。
- 次回委員会においては、蟹江委員から SDGs と F E の関係についてヒアリングを行うとともに、岸村代表をはじめ若手アカデミー構成員を呼んで議論することとなった。

（３）各分科会の進捗状況報告

- ・ 時間の関係から審議出来ず。

以 上

科学と社会委員会（第24期・第4回）議事要旨

1 日 時 平成30年7月6日（金） 15:00～17:55

2 議事要旨

（1）若手アカデミーのSDGsの取り組み紹介

●若手アカデミーの会員である岸村委員、西嶋委員及び川口委員より紹介があった。要旨は以下のとおり。

- ・従来の分野別では解決困難な課題に柔軟に対応するため、若手アカデミーの下に4つの分科会①若手による学術の未来検討分科会、②若手科学者ネットワーク分科会、③イノベーションに向けた社会連携分科会、④国際分科会を設けている。分野別では困難な課題、特にSDGs等の複雑な課題、既存の枠組みでは解決しにくい課題に取り組む場合には、力を発揮できる。
- ・昨年9月に、SDGsについて考える集会を23期の若手アカデミー副代表である狩野光伸先生が開催し、学者だけではなく高校生や様々なステークホルダーの人たちが集まった。SDGsと学術を進めるためにどういったものが必要かの議論を行っており、同年12月にフォローアップのワークショップを開催した。
- ・SDGsを持続的に進める上では、国際的な文脈での持続性の観点からのグローバルな協力、地域間での連携と国内の持続性の観点からの人材育成、地方創生がある。
- ・諸外国との連携では、グローバルヤングアカデミー（GYA）、各国若手アカデミー（NYAs）との集まりがあり、SDGsの絡みから若手アカデミーがどのように貢献できるか、科学的助言、科学コミュニケーションや若手科学者トレーニングして行くにはどうしたらよいか等の声明が出されている。問題意識としては、日本の若手アカデミーも賛同して活動している。また、アジアでの各国若手アカデミーとの連携も強化しており、我々が積み上げてきた歴史・経験を伝えて、彼らの持続性にも貢献できると考えている。
- ・若手アカデミーの国際関係イベントとしては、国際分科会が正式に動いているが、アジアで若手アカデミーとの連携をするような会議とか、ワークショップを3月に開催し、韓国若手アカデミー（Y-KAST）と交流をした。また、GYA、INGSAとの共催で、11月にイベントとして能力開発ワークショップを行うこととしている。
- ・イベントの運営や参加するための経費が掛かり、こういったものに使える予算が十分でないという問題がある。GYAはドイツから安定的にfundが出ているが、適宜お金集めをしている。また、他の国の若手アカデミーでも独自にfundを集めている。我々もSDGsと関連して何か予算が取れないか議論しているところである。
- ・SDGsを遂行するためには人材の育成が必要であるが、博士課程を卒業した後どこに行ったか分からない人たちをどうするか。最終的には、産業界が、メッセージとして、高い専門性、案件遂行能力を有する人材を雇用することが考えられる。アカデミアとしては、高い専門性、案件遂行能力を有する人材を創出するということを、産業界とアカデミアの協働声明として若者へ提示したい。
- ・学部生250万人、大学院修士課程16万人、大学院博士課程7万人、ポスドク7万人と少なくなっているのが現状である。
- ・未来分科会で学振PDの倍増を提案しているが、現在、ポスドク15,000人、学振PDは1,000人しかおらず、全体の10%を切っている。現状もっともフェアなポスドク審査制度であり、ここを拡充するということは多くの若手に納得できる支援であると考えている。
- ・学振PDは、ポスドクそのものの研究テーマで取り組めるので、本邦の研究の多様性が高くなる。我が国の中で行われている研究の多様性を高く保つためにも非常に良い。

- ・必要経費として、約5百万円/人/円、1年間で採用される人間が350名、これを2倍して700名とすると、約20億/年、科研費2,000億円/年の1%でも回せば、サステナブルなアカデミーができ、SDGsを進めることができる。
- ・若手から、アカデミアに残らない人の選択肢、通年雇用、企業の大学講座が短期的思考に基づいている現状の打破などの課題をシニアが考える必要性の提案があった。

(2) FEとSDGsについて

● 蟹江委員より、資料により説明。要旨は以下のとおり。

- ・フューチャーアースとは、持続可能な地球社会のための知を生み出す国際的研究連携のプラットフォームということで、研究に非常に重点が置かれている。対象は、地球環境の変化というフィジカルなものと、その中にいる人間と両方を対象として、そのインタラクションというものも関連している。そういう意味で対象はかなりSDGsとオーバーラップしている。
- ・フューチャーアースは研究者中心、SDGsは政府中心に進められていると言える。
- ・活動としては、人文社会科学、自然科学の連携・統合をしていこうというのが目的として一つあり、その上で社会との知の共創と共有による複合的な課題解決というのがある。そういう意味でステークホルダーとの超学際的連携をしていて、designの段階からproductionしていき、最終的に成果を生かすというところまで含まれるということを考えると、例えば、産業界との連携というツールもあり、NGO等をツールとして考えるというものもある。その過程でコラボレーションも大事である。中身の部分で、かなりSDGsがツールとして活用できるというところがある。
- ・フューチャーアース自体、国際的な研究計画がエラボレートして、結果、出来たものである。SDGsは、2011年にアイデアを出して、2012年に実際に創ろうという話になり、2年間の考証があり、一年後まとめ上げ2015年に創ったというプロセスだが、その辺りのプロセスもかなりオーバーラップしている。
- ・また、SDGsを創るプロセスでは、科学的な知見を1年ぐらいかけてネゴシエータにレクチャーし続けていたが、そこで相談していた人にはフューチャーアースの活動に関連している人が多く含まれていた。フューチャーアースのいう科学と政策のコラボレーション、インタラクションといったところが、いいタイミングで出てきたのが、SDGsの場ではなかったかと思っている。
- ・国際的な事務局が、カナダ、アメリカ、スウェーデン、フランス、日本とあって母体となっている。日本は学術会議が母体となっており、実際に設置しているのは、東京大学のIR3Sとなっている。また、地域の事務局としては、アジアの事務局として京都の地球研となっている。
- ・個別のプロジェクトとフューチャーアースの活動というのは、結構、最初からどういう関係にあるのかというのが分かりにくくなっていて、フューチャーアースが、当初はいろいろなことをやってくれるはずなのに、何もやってくれないという不満が出ているような現状がある。
- ・SDGsに関しては、課題ができてから、オプションを出し、評価し、実施していくと、最終的に目標に至って、どれだけ進捗しているかモニタリングし、レビューしていくという点があるが、いろいろなサイエンスが関係して、その中のステークホルダーの一つがフューチャーアースといってもいいのではないかなと思う。

*学術会議におけるSDGs関連委員会・分科会の関係の図について、分かりにくいとの意見があり、渡辺委員長より、完成版でなくてよいので、たたき台となるような図を次

回までに各委員から提案頂きたい旨依頼があった。

(3) SDG s と提言の紹介

- ・渡辺委員長より、学術会議のホームページで、「SDG s とのかかわり―第23期に発出した提言・報告書を中心に―」として提言等を掲載しているが、これらの提言等について英語版の要望が多方面からあるので、その作成にあたっては、各提言等を作成している委員会等にタイトルと委員会等名の英語版を依頼したいとの発言があった。
- ・ホームページ掲載では、1 提言につき 1 目標を割り当てているが、他の提言も見られるよう対応したい。また、今後出す提言については、1 提言複数目標を割り当て、その関係がわかるようにするのがよいとの意見があった。
- ・SDG s の関係から、提言等を出してもらう場合のチェックシートに、SDG s の分野に関与するか、英文タイトルはあるかということの追加を検討することとなった。
- ・本委員会として、SDG s がフォローしている以外の部分について提言して行くこととなった。
- ・SDG s 取り組みの意義の1つには学術会議の体質改善がある。分野別委員会がその分野の必要性を訴えることが中心であった従来から、分野を超えて課題を検討し提言することの比重を増やすことを体質改善とすべきとの発言があった。

(4) SDG s の最近の動向について

- ・個別の議論なし。

(5) 提言のチェックシート及びチェックシートの変更について

- ・課題別審議等査読分科会において、検討することで了承された。

(6) アジア学術会議におけるセッション企画について

- ・渡辺委員長より、今回の委員会の場で議論する時間がないので、メンバーから手を挙げてもらい、そのメンバー（遠藤委員（第一部会員）、沖先生（連携会員）、西嶋先生（連携会員））で打ち合わせをし、SDG s の次に来るもの、SDG s では捉えることのできないような学術として大事な課題は何かということセッションで行うことを考えている旨の報告がされた。

(7) 主張が異なる提言や報告の配慮や調整について

- 資料6の質問状で指摘されている通り、一つのことについて異なる意見の提言等が出てくる場合がある。学術会議として、今後、このように対してどう対応すべきかについて審議がされた。要旨は以下のとおり。
- ・研究の世界では、主張が異なることは当たり前にある。従って、個人的には、学術会議としては、仮に主張がぶつかっても、それぞれが独自の提言等を出していいのではないかと思っているが、それでは問題があり、無理矢理一つの提言等に統合し、結果として間違っていた場合は謝罪する、という考えもある。様々な観点がある課題であり、いろいろ議論しないといけないと思っている。
- ・査読の段階で、チェックを厳しくすべきであり、提言等のチェックシートの「9. 既出の提言等との関係」に、既出の関連提言等の具体的情報を記載するなどしつつ、提言等を世に問うという形しかないと思う。
- ・チェックシートに既出の関連提言等を書いて欲しいと言っても、学術会議が発出している提言等は非常に多い。その提言等が扱ったテーマに関連する過去の提言等を洗い出す

のは現実的には難しいのではないか。

- ・本件については、本委員会で継続審議することとされた。幹事会附置委員会「危機対応科学情報発信組織準備委員会」との整合も必要であり、その委員長である高橋幹事が中心となって検討することとなった。

(8) 今後の委員会検討体制について

- ・「日本の展望」の2020年版の作成に当たって、本委員会と若手アカデミーと連携し、議論するため、本委員会に新たに分科会を設置することが提案され、了承された。
- ・提言等のチェックは課題別審議等査読分科会で行うことになるので、当該分科会を10月総会中に開催することが提案され、了承された。

(9) サイエンスアゴラ2018の後援に係る審議付託について

- ・特に問題なく、後援を行って良い旨が了承された。

(10) その他

- ・次回、総会時の10月4日（木）12時から13時30分に開催することとし、次々回は、12月6日（木）13時から15時30分に開催することとされた。
また、当日アジア学術会議が開催され、16時から本委員会の主催セッションが行われるため、委員への出席依頼が行われた。

以 上

科学と社会委員会（第24期・第7回）議事要旨

1 日 時 平成30年10月4日（木） 12:20～13:05

2 議事要旨

（1）科学と社会企画分科会からの報告と課題

- 渡辺委員長より、資料1-1及び1-2に基づき、科学と社会企画分科会及びそこで審議された日本の展望に続く提言について報告があり、以下の補足があった。
 - ・科学と社会企画分科会の審議に基づく提案を10月3日の幹事会懇談会で行い、先ずは10月25日の幹事会で体制作りを行うこととなった。
- 上記に基づき意見交換があった。概要は以下の通り。
 - ・前回の日本の展望の内容をある程度引き継ぐものにする必要があるだろう。
 - ・「提言」という形式は堅苦しいので、もっと国民に親しみやすい形式が良いのではないか。
 - ・学術会議が議論を積み重ねて社会に提案するものなのだから、やはり「提言」とすべきではないか。

（2）提言等の見える化について

- 藤原委員より、資料2-1～2-3に基づき、インパクト・レポートの改訂等について説明があり、意見交換があった。概要は以下のとおり。
 - ・資料2-2については、案1が分かりやすい。掲載の順番は「ポイント」→「インパクト」が良いだろう。
 - ・現状のインパクト・レポートは1年後に作成し、その後のフォローが無い。1年が過ぎた後もインパクト・レポートを改訂出来れば、どう活用されているかが分かる。
 - ・資料2-3の動画やリンクについては、どこまでやれるか事務局に確認したい。
 - ・会長が行っている記者懇談会でアピールしてはどうか。
→記者に関心のあるものでなければ取り上げてもらえないので、見せ方を工夫する必要があるだろう。
- 本件については委員に考えて頂き、次回委員会で時間を取って審議することとなった。

（3）主張が異なる提言や報告の対応について

- 高橋幹事より、以下の通り説明があった。
 - ・（私が委員長を務める）危機対応科学情報発信組織準備委員会では、難しい問題に対し、学術会議の意見をワンボイスにするかどうかを検討している。
 - ・一つの方法として、意見分布を示し、それぞれに丁寧な説明を加えていくというのがある。
 - ・一方で、提言等の結論に対し、違う意見を認めるのが重要ではないか。それらの意見に言及した上で、科学としてはこう考える、という形なら、提言の科学としての意味は保たれるのではないか。
 - ・以上をお示しした上で、科学と社会委員会のご意見を頂き、それを再度、危機対応科学情報発信組織準備委員会に持ち帰って検討した上で、幹事会に提案したい。
- 上記に基づき意見交換があった。概要は以下の通り。
 - ・査読の際、提言作成委員会等がチェックシートに関連する提言等を書くようになってい

るが、どこが同じでどこが違うかを具体的に書くようにし、査読者もそれをよく確認するようにしてはどうか。

- 全ての提言等に対してそれを行うのは査読者の負担が増えるので、社会的に重要な問題に係る提言等についてのみ行うのなら理解できる。

以 上

科学と社会委員会（第24期・第9回）議事要旨

1 日 時 平成31年4月25日（木） 12:00～13:00

2 議事要旨

（1）学術会議からの情報発信についての考え方について

- 高橋幹事より、資料5に基づき説明があり、意見交換があった。概要は以下の通り。
 - ・提言等については、学術会議の責任と、作成した委員会・分科会の責任は分けられるのか。
 - 既に設置期限が終わっている委員会等については考えなければならぬ。幹事会を通っているという意味では学術会議にも責任があるだろう。
 - ・提言等の内容が最新の知見でアップデートされることはあり得る。このアップデート（リバイス）のプロセスを明確にすべきではないか。
 - ・特に政治的に利用されやすいものは他の提言等の整合性をチェックしたり、両論併記を行った方が良好だろう。
 - ・過去の提言等との整合性を提言等の内か外か、どこかに表記するというのも考えられる。
- 本件については高橋幹事が今回の意見を踏まえて整理し、メールで委員に諮ることとなった。

（2）SDGsに係る提言のHP掲載について

- ・科学と社会委員会としては、日本語要約、キーワード、(英文) キャッチフレーズ、ツイッターの説明文については、提言等の作成委員会等に案を作成してもらい、科学と社会委員会で確認や修正のお願いをする方向で提案することとなった。
- ・当面は23期のHPに24期の提言等を追加していくこととなった。

（3）提言チェックシートの改訂について

- ・チェックシート9. において、既出の提言等とどういう関係なのかを書いて頂くこととなった。

（3）提言の整理の仕方、見せ方について

- ・マスコミに対し、定期的にどんな提言等が出ているかプレスリリースを送るようになればいい。
- ・探しているテーマに的確にアクセスしやすくするために、HPに掲載している提言の「ポイント」内部の検索ができるようになればいい。
- ・英文HPの充実については、広報委員会で検討することとしたい。

以 上

日本学術会議のSDGsへの取り組み

学術会議 in 富山（地方学術会議）発表資料から抜粋

日本学術会議

渡辺美代子



2019年6月28日
学術会議 in 富山 第一部
「SDGsへの取り組み」 1

学術会議のSDGs取り組み

